2012年度授業改善研修参加レポート　　所属（現代中国学部）　氏名　川村亜樹

「研修会等名称」
学士課程教育における言語・文学分野の参照基準

場所：日本学術会議
期間：７月１４日

１．研修の内容

学士課程教育における言語・文学分野の参照基準について報告・討論が行われた。

基本的には、大学の経営者や言語・文学教育の代表者が聴くべき充実した内容であった。ポイントとしては、

1. 高校や企業との連携を意識した、大学学士課程における言語・文学分野の取り組みの社会へのさらなる可視化（大学の言語教育は何をしているのか、何をやりたいのか、明確に社会に対して示すこと）
2. 日本人学生に対する日本語教育の強化
3. TOEIC や TOEFL に代わる新たな言語能力測定テスト Cefr の導入
4. 複数言語を使用できる学生の輩出
5. 言語と文学が密接に関わっていることはいうまでもないが、一方で、教養の英語はあくまで実用性を第一にした必要最低限の分かりやすい内容で、文学とは切り離して考える必要がある

といった点が上げられる。

日本人学生に対する日本語指導は、学部の専門の教員が担当するのではなく、日本語専門の教員が担当すべき、といった踏み込んだ話もあった。また、英語教育では、「コミュニケーション」という用語を再検討しており、単なる「会話」ではなく、「社会的コンテキストの中で人と人との間で行われる相互行為であり、関係性」としている。その関連として、「工夫が必要」という但し書きを付したうえで、「翻訳」（つまり英語→日本語、日本語→英語）の指導の再評価をおこなっている。いずれにしても、なんとなく、ネイティヴの会話と TOEIC 対策の授業をしていればよい、という時代は終わりが見え始めた。

2．研修の成果

大学全体の言語教育政策・カリキュラムに関わる報告であったので、今回聴講した内容は、英語教員やその他語学教員とも共有をはかっていきたい。

本学では、一部の例外を除いて、日本語の専門家による、日本人学生への日本語指導は行われていない。しかし、今後、真剣に導入を検討した方がよいだろう。

複数言語を使用できる学生の輩出という点では、本学は未修外国語が必修であるので、この取り組みはさらなる充実化を目指しながら保持すべきであろう。

ネイティヴの会話や TOEIC に振り回される英語教育にもそろそろ陰りが見え始めている。だが、それに代わる「実用英語」の内容を、本腰を入れて各大学独自に開発しなければならない時期にもきている。

日本語と英語を核とした総合的な言語教育への取り組みが、今後の各大学への評価に大きな影響を与えることが分かった。

言語研究が世界言語を貫く普遍的な規則を追求するのに対し、文学研究は「普遍」から排除された個別具体的な例外に目を向けようとするということが、分科会幹事によって確認された。このことの明文化は、日本の言語・文学に関する研究・教育において大きな進歩といえるはずである。

3．授業への研修成果の反映状況

文学の議論では、「文学の力」といったような抽象論もあったが、むしろ、文学作品を基にして、学生にいかに語らせることができるか、つまり、アウトプット能力の養成の重要性を再認識できた。もちろん、今までも、自分なりにさまざまな形で取り組んできたが、今回、新たな着想として、毎週、異なる作家の作品の冒頭を読ませて、文体の違いを説明したうえで、学生に作品を創作させてみてはどうかと思った。学生が、自身が書く立場で、他者のテクストを読む行為は、文学的知識を増やし、歴史・社会・政治への意識を向上させるだけでなく、今回日本学術会議で定義された、「コミュニケーション」能力の向上に役立つはずであり、さっそく、来年度以降、導入を図っていきたい。

名古屋学院大学

学部長	FD委員長	FD委員会	~~企画・広報課長~~	係
				深澤 12.7.18